

## 海軍関係の史料紹介(その1)

三輪, 宗弘  
九州共立大学経済学部

<https://hdl.handle.net/2324/3250>

---

出版情報：九州共立大学経済学部紀要. 65, pp.1-8, 1996-09. 九州共立大学  
バージョン：  
権利関係：



九州共立大学経済学部紀要

第六五号 抜刷

一九九六年九月

海軍関係の史料紹介（その一）

三輪 宗弘

# 海軍関係の史料紹介（その一）

## 三輪宗弘

高田利種宣誓供述書

書簡五通

端書一通

右の七点の史料を後段に掲載した。

参考まで簡略な解題を添付しておく。

### 一、高田利種少将について

古賀峯一長官の高田利種宛書簡に記されているが、高田は二回 Deng 熱に冒されている。先ずこのことについて述べておこう。「患者日誌」(カルテ)によれば、昭和十八年四月二十一日に発病し、同年五月二日に全治している。高田大佐は四月二日に作戦要務について打ち合わせるためラポールに出張し、四月十八日にトラックに帰還したが、夕刻より「肩痛腰痛悪寒発熱」があった。四月二十二日には三九・二度、二十三日朝には三九・八度まで上がったが、以降漸次体温は低下し十日程で熱も治った。二度目の Deng 熱は昭和十八年九月十三日のこと

であった。三日程で回復に向かった。高田はこのときの事情の一端を「鷹尾さんの思い出、同じ釜の飯を食った仲」と題した回想の中で触れている。(鷹尾武子編『鷹尾卓海の追想録 おもかげ』非売品、昭和四十五年一月)

高田はミッドウェイ敗戦後の昭和十七年七月十四日に第三艦隊参謀に命ぜられ、空母瑞鶴に乗艦した。(旗艦変更により一時翔鶴に転艦したが、再び瑞鶴に旗艦がかわった。)高田が機動部隊の立て直しのために派遣されたことは間違いないだろう。十七年八月十六日から九月五日まで「第二次ソロモン群島方面作戦」に従事し、九月六日から十月三十日まで「南太平洋方面作戦」に参加した。翌十八年四月二日から四月十八日まで「い号作戦」に従事した後、五月二十九日連合艦隊司令部附になり、五月三十日から旗艦武蔵において黒島亀人首席参謀から申継ぎを受けた。上述の Deng 熱のため少し遅れ六月十一日から連合艦隊参謀に親補された。以下高田自身の回想から往時を振り返ろう。

「私は連合艦隊作戦要綱と連合艦隊第三段作戦命令の起案に没頭し、それ等が発令せられたとき南東方面艦隊に作戦命令説明のため出張し

だが、不覚にもラポールに於て再度デング熱におかされ体力の衰弱が甚しくなったので、昭和十八年十一月十五日中沢大佐に首席参謀の大役を譲り、古賀司令長官の特命に依り連合艦隊戦策の起案に当り十二月一日軍令部出仕を命ぜられ、戦策の印刷発布を監督することとなった。(前掲『鷹尾卓海の追想録 おもかげ』三六頁)

山本五十六GF長官の戦死後、連合艦隊司令長官に親補された古賀峯一長官(十八年五月二十一日から十九年三月三十一日までGF長官、海兵三四期)は、兵力の整備後、米国海軍と一大決戦に持込むべく、あ号作戦を立案していた。海軍が航空兵力をすべて次ぎ込んだマリアナ沖海戦である。この戦闘で海軍は優秀なパイロットを失い、機動部隊は崩壊し、以降の作戦に大きな支障をきたした。高田利種宛書簡は、古賀GF長官が当時の様な思いで海軍の兵力を考えていたのかを伝えており、貴重な史料である。

海兵四〇期の福留繁中将の高田宛書簡も一部あ号作戦に触れている。しかし内容については「六つかしい御伝言」とだけであり、立ち入った記述がないのが、残念である。

ところで、高田利種は、海軍省軍務局第一課課長という重要ポストで、開戦にいたる海軍の政策決定に大きく関わった。

高田少将と筆者との出会いは、私が及川古志郎海軍大臣への評価が低すぎると言うことを書簡で問い合わせたことが契機になった。以来、昵懇にしていた。幸いにも筆者は、時々高田少将のお宅にお伺

いし、海軍時代の回想をおうかがいでき、世田谷区中町にある邸宅で、朝御飯に誘われたりもした。高田少将には貴重な話をしていただき、筆者の戦史研究・歴史研究に活字以外の視野を開かせていただいた。微力なりに、今後逐次高田先生に厳密な研究・史料紹介という形でお礼を活字でできればと考えている。なお、戦後高田は生化学工業の社長・会長として第二の人生を送った。

掲載した「高田宣誓供述書」は、極東軍事裁判で岡敬純海軍中将を弁護したものである。日時は記録にないが、昭和二十一年か二十二年に作成されたものであろう。岡海軍省軍務局長が開戦を避けようとしたことが、意識的に述べられている。岡中将は結婚されず、子供がいなかったため責任を自ら被った結果、戦後に書かれた著書では悪く書かれている場合が多い。海軍でA級戦犯に問われたのは、永野修身軍令部総長と岡局長の二人だけであった。

角田順氏の「日本の対米開戦」(日本国際政治学会編『太平洋戦争への道』第七巻、朝日新聞、昭和三八年)では、戦争への道をリードしたかのような書き方で描かれている。高田利種も第一委員会のメンバーであったため、『太平洋戦争への道』の中では悪く書かれた。高田はこの本を読んだとき、岡への評価はおかしいと感じたはずである。

私は海軍の若手士官から岡局長が開戦に最も反対した一人である、ということを知った。(市村忠一郎大佐、土井美二大佐)筆者は一次史料を読む限り、開戦を避けようと努力したことは間違いないと考える。だがどう言うわけか、戦争を避けようとした人に開戦の責任をか

ぶせ、戦争に積極的であった人が反対であったかのように書かれている場合がおおいように感じてきた。高田利種少将と若き戦史研究者の私とを結びつけたのは「こんな評価で本当にいいのか」という年齢を超越した疑問であった。高田利種は当事者であるから語れなかった、いや語りたくても自己弁護と取られると思われたであろう。高田の書いたものと一緒に史料に乖離がなかったからこそ、筆者は最初に手紙を書いたときから高田という人は信用できる方だと思っていた。生意気な言い方を許していただけるなら、歴史家としての己をかけた直感であったと思う。一次史料を読み込んでいた私は、当時すでに戦史研究家の著書をまったく信頼していなかった。あまりにも戦後の価値観に盲従していたからである。

## 二、森田貫一中将について

森田中将は三重県桑名市出身であり、私が三重県員弁郡出身で桑名高校を卒業したことから、インタビューにお伺いして以来、大変親切にしていたいただいた。同郷のよしみである。筆者の下宿から自転車で五分とかからない距離だったので、よく昼飯を御馳走になった。

森田中将は、海軍機関学校二十三期であり、最後の海軍省軍需局局長である。昭和十五年十一月十五日から連合艦隊機関長を務めたが、真珠湾攻撃前に徳山市にある第三海軍燃料廠精製部部长に栄転した。森田少将にとり、不本意な栄転であったことは、書簡から読み取れる。

山口多聞中将とは第五艦隊時代に海南島攻略作戦とともにし、以来親交を深めた。(山口は参謀長、森田は機関長) 山口端書はハワイ作戦大成功を受けており、「其の内蘭印を取って油がダブツク時節が来ると存じます。が過般製油貯蔵等中々容易でないと思えます」と書き、さりげなく森田を慰めている。

山本五十六GF長官の書簡は昭和十七年十月という時点に書かれている点に注目しておきたい。(森田貫一は徳山を離れ、昭和十七年九月一日付けでバリックパンにある第一〇二海軍燃料廠長として赴任した。) ミッドウェイで負け、ガダルカナルでの膠着状態の苦しい戦いの最中の書簡である。なお、山本五十六GF長官には東京裁判に出された書簡集「五峯録」があるが、原史料がなく、照合が行われていないことは十分に注意すべきである。なお、筆者は「五峯録」は書き換えられたと考えている。

## 三、三和義勇大佐と小野田捨次郎大佐について

三和大佐と小野田大佐は海軍兵学校四十八期のコレスである。掲載した二通の書簡は、小野田大佐と親交があった高林金太郎氏からコピーを取らせていただいたものである。筆者は返子市で三和未亡人にお目にかかったが、以来日記を見せていただくなど研究に便宜を図っていただいた。「三和義勇日誌」は貴重な史料であるが、昭和十六年度の日誌が紛失してしていない。これは連合艦隊の動向が東京裁判で明され

るのを防ぐために、焼却されたのであろう。実際連合艦隊で枢要にいた軍人の日誌はどういうわけか昭和十六年がすべて欠落している。軍艦新聞も昭和十六年が見つかからない。海軍が組織的に徹底的に昭和十六年度の連合艦隊の動向を隠匿せんとしたかがわかる。

さて、三和小野田がいかにかに仲が良かったかは、書簡が余すところなく伝えてはいるが、また開戦直後の高揚した雰囲気を出している。三和大佐は当時連合艦隊作戦参謀であり、一方小野田大佐は軍令部第一一部員であった。航空機が今次大戦の鍵であったことが、三和書簡からも伺えよう。これは古賀の高田宛書簡からも読み取れる。三和は昭和十九年八月二日テニアンで戦死した。また小野田捨次郎は随想『げすのあと思索』を書き残し、昭和四十八年に他界した。

### 高田利種宣誓供述書（岡敬純の弁護）

私の住所は東京都世田ヶ谷区玉川中町一丁目九五五番地です。

私は一八九四年一月十五日に生まれました。私は元海軍少将であります。一九三五年七月一日より一九三七年十一月十五日まで、海軍省軍務局第一課局長として、海軍の制度及び定員を担任して居りました。次て一九四〇年十一月十五日より一九四二年七月十四日迄海軍省軍務局第一課長の職に在って、海軍の軍備及軍制に関することを担任しました。この期間に於ける、海軍省軍務局長は岡敬純であり、私は其の部下の

一人でありました。

岡は対米戦回避の方針の下に同氏として為し得る限りの努力を続けました。日米交渉が纏まらぬので、岡は常に心配してゐました。一九四一年八月上旬と記憶して居りますが、岡軍務局長が非常に嬉しそうな顔をして外出先から局長室に帰つて来て、大きな声で私を呼ばれましたので、私が局長の傍に参りますと、政府で内密に汽船を一隻徴備したいが名案があるか、と問われました。私が「何事ですか」と尋ねましたら、局長は「之はまだ公表出来ないことだが、近衛総理大臣が非常なる決心を以て米国大統領と直接交渉に出掛けた」と云ふのだよ」と申されましたので、私は「内閣で傭入れたり日本郵船会社に内命を下されたる方法では、自然世間に漏れるでせうから、海軍で支那事変用として徴備すること、し、其の経費を後で内閣で処理して貰へばよろしいでせう」と答へました。其の翌日、私は岡から「昨日の話の船を準備せよ」と命ぜられましたので、船舶徴備に関係ある配置の人達と連絡した結果、日本郵船株式会社の新田丸が徴用せられました。

新田丸を横須賀軍港に回航し、次いで無線電信機教台と横須賀海軍工廠の工具とを乗せて横浜に回航し、それ等無線電信機械を装備して何時でも出港出来る様に待機せしめられました。右と同時に、海軍通信学校の教員の中から選拔せられた優秀者を交へて、十数名の電信員が横須賀海兵団に於て待機せしめられ、新田丸が出港と決定したらば直に乗船せしめられることになって居りましたが、比等優秀なる教員を引き抜くことは海軍の電信員養成の障害になるであらうとて、教育

局から質問があつたとき、岡軍務局長は日米交渉を成功させることは何よりも大事なことであるから、新田丸に対する要員は之を準備せねばならぬとの意見を以て、此の問題を処理したのであります。私は岡の下に仕へた全期間を通して、新田丸の準備を命ぜられたとき程、岡軍務局長の嬉しそうな顔をされたのを見たことがあります。そして彼が近衛首相がルーズベルト大統領と会見に行くことに決したと告げたときの、興奮した面持は忘れることは出来ません。

新田丸は其俣横浜の港内に繋留せられ開戦後迄其の俣でゐました。増備せられた無線信機が取り外され、実際に海軍の徴備船として任務に就かしめられたのは、日米開戦となつた後でありました。

中国からの撤兵問題を含む日米交渉の難点に関し、岡は撤兵して支那事変を速に解決し日米戦に突入してはならぬとの意見で、日米戦回避の為に、岡として為し得る懸命の努力を尽しました。日米交渉の行はれてゐた当時、交渉が少しでも好転すれば、岡の顔は非常に晴々しくなり、其の反対に傾く時は、顔色が大変悪しくなり実に不愉快そうな顔をして余り物を云はれませんでした。それで私は岡の顔色を見て居れば、日米交渉の雲行がわかるよと人に話しことがありました。

一九四一年一月法曹会館で中央物価協力会議主催の講演会があり、全国から数百名の有力者が参集したとき、其の主催者が岡局長に海軍の意見を述べてほしいと依頼して来たことがあります。岡局長は上司の内意を伺つた上で、局長の代理として私を派遣して後援せしめられました。岡の考へ方は、国家の發展は平和的経済的でなければなら

ぬ、国家の政策は平和的であらねばならぬ、と云ふに在りました。其れ故、岡は私に其の趣旨で講演する様に指示されました。私個人の意見も彼に一致しましたので指示の如く致しました。私は海軍の目的は戦をするのみではなく、商船隊の發展に後立てとなるのが第一の重大使命なりと述べました。

付記 原本はカタカナであり、句読点は補つた。

書簡一三和義勇発 小野田捨次郎宛 日付けなし。

御惠贈の東洋思想研究本日拝受 御芳志千萬深謝仕候 唯今一氣読了松蔭玄瑞談殊の外感慨無量当世悉あてはまるが如き感致候 特に雄志大略に時勢時機審察を説くあたり正に当意の言と被存候 迂生靜思反省これではならぬと戒心まかりある在罷次第、真に頂門一針を与へられたる為体に御座候 時に支那善後処置何とかならぬものにや 陸軍の支那と云ふ様な偏狭な考へでは到底支那は料理出来ざる可し 日本の政治家に較べて見れば汪蔣共に何層倍か苦勞も経験もある人物 これをしつかり膝下に手なづけられむ様では大東亜政治も如何なものにや 日支問題を大西郷陸海対勝海陸会谈の様にやつてのける大政治家は日本にはないものか 或はそれが出られぬ大障害があるのか等とつおひつ考へることも有之候

妄言多謝

乍末筆賢兄の御健康を祈つて擱筆仕候

先は御礼迄

敬具

義勇生

捨賢兄

玉机下

表紙

東京市麹町區軍司令部第一部

小野田大佐殿

裏 軍艦大和司令部

三和義勇

書簡二 三和義勇発

小野田捨次郎宛

昭和十六年十二月十八日付け

御手紙拜見以先緒戦の快捷為邦家為海軍慶祝の至。事茲に至る迄政戦両略をかく迄一致せしむるに当り特に貴官等の御骨折御苦心察するに餘りあると共にGFとしては大いに感謝しある処也。之なくしては迎も布哇海戦は成立つものに非ず。キンメル例はよき反証なり。今に至りてルーズベルトノツクス輩の立ち騒ぐも不及。キンメルこそ気毒至極に在候。此の作戦に於てしみく〜と感銘したるは天佑神助我に在ることなり。日本は神国なること也。何となれば当時の天気模様は東は移動性高気圧機動部隊共に東進して危まれる補給も何とか成就し候。西は雨天雲天にして大輸送船団自ら隠されて難なく目的地に達す。人業には非ず神明の加護無くして誰が成し得る処。噫日本は神の国なる哉。

布哇、馬來沖両海戦共。吾人r屋が多年問題としたる処を実証解決したるものと考ふ。チャーチルが英の海軍々備様式の変革を要すと叫びたること、若し這般の点を認識したりとせば。彼も相当もの解りよき男也。帝国海軍中堅以上の歴々。チャーチルに劣るもの今は無しと思ふが如何

何としてはrが足らぬ零戦千機陸攻千機これが持たして貰へる様に、貴官も神に祈つて呉れ。三号艦以降何の役にも立たざる可、当方長官至極元氣且余裕綽々、毎日例の通警句を咄いて御座候、そして時々痛棒を喰はされて居候

何か書いて貰ふ件、折を見てきつと果す

小生頑健但し往昔の秋山参謀とは似ても似つかず忸怩たり。遙に貴官の御清武を祈り擱筆する。失敬

十二月十八日

義勇生

捨賢兄

表紙 東京都霞関軍司令部第一部

小野田大佐殿

親展

裏 軍艦長門司令部三和大佐

書簡三 古賀峯一 高田利種宛 昭和十九年一月二日付け

謹啓十二月二十七日付芳墨難有拜受仕候 過般柳沢君御宛御手紙  
によれば御上京後高熱にて御困のよし相察居候処 最早や御全快のよ  
し先津安神仕候 今の内御加養專一に奉願上候

願はは昨年五月病後の大兄を無理に当司令部に来て貫ひ日夜間断なき  
活動に御勉強の結果体力の恢復おくれゆく段 小生としては誠に相す  
まぬ次第に御座候 何卒比際一意御加養速なる御恢復の程奉祈上候  
其後の戦局の推移御存の通にして 結局<sup>航路</sup>力<sup>航路</sup>の不足が基に御座候 只  
今<sup>閉鎖不可</sup>及島田君上京折衝中に候 日本の資材と人の1/2より成る海  
軍航空力を以て米の陸海軍機と英の航空力の一部とに独力にて對抗せ  
ねはならぬ所に無理があるものと被存候。日本と米英との戦争に非ら  
ず日本海軍と米英との戦争なるか如き変態は一日も速に修正すべく、  
機材とならぬ資材、飛はぬ投乗員の如きは速に之を海軍に繰り入るべ  
しと云ふが如き一大英断を行はねばならぬものと確信仕候 東条大臣  
の如きは不知ては過を冒し<sup>で</sup><sup>お</sup>るものと存じ候 誰か直言する人なき  
や?等の言はつゝ耳に致居候

邦家重大の秋切々御自愛を祈上候

正月二日

古賀峯一

高田大兄

表紙 軍令部副官気付 高田利種大佐殿 親展  
裏 古賀峯一

書簡四 福留繁 高田利種宛 昭和十九年一月三日付け

拝啓 帰京されると御病気でしたそうですが最早やよろしくなりまし  
たか 本日<sup>梅、五期</sup>山本参謀がかへりまして御托送の御懇書正に拝見致しまし  
た こちらに御勤務中は格別御世話になりました 深く感謝に堪へま  
せん 不思議な御縁で二度迄御世話になりました 二度ある事は三度  
あるといひますからきつと今一度御世話になると思ひます 何卒今後  
共一層よろしく御願致します 寒い東京での御養生は中々骨の折れる  
こと、思ひます 何卒一層御自愛のほど折り上げます 戦争の件有り  
がたう御座います又<sup>閉鎖不可</sup>長への六つかしい御伝言もありかとう御座いま  
した

一月三日

福留 繁

高田大佐殿

表紙 軍令部副官気付 高田利種大佐殿  
裏 福留繁

書簡五 山本五十六発 森田貫一宛 昭和十七年十月十日

貴翰難有拝見致候

過去一ヶ年の御厚誼に対し厚具御禮申上候

新今年度は諸種の事故に依り出鼻をたたかれ之も何かの箴と自戒自省罷在候

現下最大の緊急問題なる燃料生産に対しては種々御苦心の御事と拝察致居候

数年前ある問題の際軍需局多数の態度は「今日迄燃料にて御心配をかけし事なし餘計な心配は御無用」との態度なりしが、夫等の人にては将来の燃料問題は解決困難と憂慮に不堪応急策と根本策とに分ち充分の御成策を密に期待する次第に御坐候

秋晴の好時節御自愛御清勝偏に祈上候 敬具

十月十日 山本五十六

森田貫一様

表紙 徳山市海軍燃料廠 森田貫一閣下

裏 長門 山本五十六

端書一 山口多聞発 森田貫一宛 昭和十七年一月八日付け

拝復

旧臘第一次任務終了呉に販港不日再び征途に就くそうです 昨日十一月十七日付貴信落手 貴方脾肉の嘆に御同情申上くると共に新御任務の重大性を考へ大に御活躍を期待する次第です

其の内蘭印を取って油がダブツク時節が来ると存じますが過般製油貯蔵等中々容易でないと思ひます 時節柄切に御自愛を祈り上げます

一月八日

山口生

森田盟兄

玉札下

末筆乍御令聞其の後の御様子御案じ申し上げます 切に御恢復を祈ります

端書表紙 山口県徳山市海軍燃料廠 海軍少将 森田貫一様

付記 書簡のカタカナはひらがなで表記した。